

大学適応の階層性に関する検討⁽¹⁾
— 保育系短期大学生を対象に —

小平 英志

日本福祉大学 子ども発達学部

Hierarchical adjustments of junior college students
in an early childhood education course

Hideshi KODAIRA

Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

Abstract

Junior college students in a childcare training course are expected to adapt to a wide variety of conditions, to gain as much knowledge in the area of child development, and to learn certain skills about childcare during the short period of schooling. In many cases, they will work as childcare workers, two or three years after they graduate from high school. The present study examined the hierarchical adjustments of junior college students in an early childhood education course: adjustment to college, interests in specialized learning, willingness to enter a profession, and the efficacy of keeping a job were investigated. Time 1, Junior college students (N=204) completed the Hierarchical Adjustment Scale, measures of satisfaction with friends, Learning and College Life Scale, and a questionnaire of the possibilities of a career as a childcare worker. Four weeks later, at Time 2, participants (N=217) completed the Hierarchical Adjustment Scale and the Identity Status Scale. Results provided support for the reliability and validity of the Hierarchical Adjustment Scale. The analysis of cross-lagged effects model revealed that adjustment to college predicted the efficacy of keeping a job. Moreover, contrary to expectations, the efficacy of keeping a job had significant effects on interest in specialized learning and the willing to enter a profession.

Keywords: adjustment to college, training school of childcare worker, commitment, job hunting

問題と目的

大学・短期大学に専修学校を含めた進学率は、平成22年度では7割を超えている（文部科学省，2010）。進学率の上昇とともに入試形態も多様化する中で、様々な発達の文脈や個人特性を持つ学生が高等教育の「入口」に集まっているのが現状である。これまで、大学適応を

扱った心理学的研究が国内外を問わず数多く発表されてきたが、近年では、入学前後の友人関係（Swenson, Nordstrom, & Hiester, 2008）や親子関係（Agliata & Renk, 2008; Hickman, Bartholomae, & McKenry, 2000）、居住環境（Enochs & Roland, 2006）から、パーソナリティ傾向やソーシャルサポート（小平・安藤・中

西, 2003; Lidy & Kahn, 2006), さらには ADHD 傾向 (Norvilitis, Sun, & Zhang, 2010; Rabiner, Anastopoulos, Costello, Hoyle, & Swartzwelder, 2010) まで, 様々なリスク・ファクターが注目され, 検討が行われるようになってきている. 大学生の初期のドロップ・アウトやモチベーションの低下は今日的な課題とされ, 特に初年次教育の重要性が多くの研究で指摘されている (ex. 小平・鈴木, 2008).

一方で, 学生たちに精神的な健康状態を維持させ, 大学在籍期間を無事に終えさせることだけが高等教育のねらいではない. より専門的な学問を学び, 広い知識や視点を身につけ, 社会へと送り出すことが教育機関としての重要な役割である. 近年では, 雇用状況の劇的な変化を背景に, 教育の職業的意義が殊に問われる時代となり (本田, 2009), 職業指導の義務化の流れも相まって, 高等教育の「出口」に対する責任についての議論が活発化している. 学生の在籍期間において高等教育が何を提供し, そのために何をなすべきか, 今一度熟考すべき時期を迎えていると言える.

従来多くの研究では, 大学適応の程度は自尊感情や精神的健康に関わる測度によって測定されてきたが, 先述のように, 精神的に健康な学生が, 必ずしも教育の文脈上, 適応的・理想的な学修状態にあるとは限らない. 例えば大学で多くの友人に恵まれて, 大学生活が楽しくて仕方がないという学生が, 専門の授業で優秀な成績を収め, 就職活動に熱心に取り組むかという, 必ずしもそうはならないであろう. 本研究では, 学生たちが大学生活の中で何を要求され, それに応じていくのかという心理・社会的な適応の視点に, 高等教育の文脈からみた「入口」から「出口」までの望ましい学修という観点を含めて大学適応⁽²⁾を考えていきたい.

本研究ではこのような視点から, 保育者養成の短期大学に注目する. 保育者養成の短期大学では, 一般的に2年もしくは3年の期間で保育者の養成が行われ, 学生たちは短い時間で様々な課題, 環境に適応することを求められる. また, 学ぶべき学問と専門職との対応関係がはっきりしており, 高等教育の「入口」から「出口」までの各教科や行事の位置づけ, 学生の到達目標が比較的明確である点が特徴である. 本研究では, 初期の適応は, 後の適応のための基礎となり, 複数の適応課題が連続性をなすものであるとのモデルを検証し, 保育者養成校の学生の適応を階層的に捉えてみたい.

保育系短期大学生に求められる適応

保育系短期大学の学生に求められる適応とはどのようなものだろうか. 本研究では, 適応的な状態を, その時点で求められる教育・学修上で重要な事柄へとコミットメントしている状態 (興味・関心を持っている, 意欲的である, 具体的に行動している) であると定義する. 以下, 実際の学生像を交えながら, 保育者養成校で求められるコミットメントの側面を考えていきたい.

a) 大学適応

学生たちにとって, 入学後の最初の課題となるのが大学生生活全般へのコミットメントである. 保育系学生に関するこれまでの研究では, 自我同一性に注目したもののいくつか見られるが (ex. 西山・富田・田爪, 2007), 近年の青年たちでは, 「自分がわからない」などの内的で抽象的な問題としてではなく, 「友達ができない」「居場所がない」といったより客観的で具体性のある問題として訴えられる事が多い. 自我同一性の感覚を支える重要な要因として「居場所」に着目した研究は多いが (ex. 小沢, 2000), 特に大学での学修が将来の職業選択と密接にかかわる保育者養成校では, 学びの場としての大学が居心地のよい場所になることが重要である. 学生が自らを保育という学問や保育者という職業と関連付けていく過程において, 大学に「なじむ」事はその基礎となる部分であると考えられる.

従来から保育者養成系の学部・学科は, 他分野の学部・学科と比較して, 一般的に退学者が少ないことが指摘されてきたが, 近年では他学部・他学科と同水準になりつつあるとの指摘もある (上原, 2008). 実際に養成校では, 大学になじみず入学後の早い段階から登校しなくなる学生や, 仲間関係が上手くいかずに, 保育者になる意欲を持ちながらも勉学に身が入らない学生もいる. これらは狭義の大学適応の問題であり, この段階での躓きは, 養成校での科目履修や学習意欲を妨げることとなる. 先述のように, 養成校で保育者を目指す上で学習の前提となるものであると考え, 本研究ではこの側面へのコミットメントを「大学適応」と呼ぶこととする.

b) 専門領域への興味

大学生生活に慣れることに続き学生たちが求められるのは, 専門科目へのコミットメントである. 入学後は, 学修が進むにつれてより専門性の高い授業を履修すること

が求められていく。短期大学における保育者養成では、講義科目だけでなく、早期に演習科目や実習なども加わり、学習が急激に実践的な内容に変化していくのも特徴である。実習前後の心理的特徴の変化に関する研究は数多く見られるが、一般的に、実習後に保育に関する自己効力感は一時的に上昇する傾向（浜崎・加藤・寺園・荒木・岡本，2008；三木・桜井，1998）にある一方で、知識の獲得や実習経験を通して保育の困難さを体験し、自己効力感を下げる学生も数多い（石川，2005）。この時点での躓きは、保育に対する関心を低めることとなる。保育の専門科目にはあまり興味を持たず、スポーツや語学などの教養系科目にのみ力を入れているような学生も少なからずみられるのはこの側面での躓きがあるからだと考えられる。この側面でのコミットメントの低下は、本業の学問からの減退傾向を特徴とするスチューデント・アパシー傾向（鉄島，1993；下山，1996）とも対応するものである。本研究ではこのコミットメントの側面を「専門領域への興味」とする。

c) 専門職への志向

保育者になるために入学し、熱心に授業を受講した学生であっても、就職活動を始める頃までに保育職に就く自信をなくし（あるいは、最初から自信を持てずに）、他職種への就職を希望するケースは少なくない。保育系短大生の就職動機づけについて検討した安藤（2007）では、進路変更者にその理由を尋ねている。自由記述では、積極的な進路変更を理由に挙げる者よりも、「思い描いていたものと違ったから」、「やっていけるか心配だったから」、「あまり向いていないと思ったから」などの保育職に就く上での適性に関する問題点を記述する者が多かったことが報告されている。また、自我同一性と保育職の職業認知との関連を検討した西山他（2007）では、自我同一性の感覚は、保育職の適性感を介して保育職への関心・興味やコミットメント（保育に関する自主学習や就職活動など）に影響を及ぼすことが示されている。多くの学生は、専門的内容の講義や実習を経験した上で、自らの適性を問う機会に直面すると考えられるが、適性の認識は保育や子どもへの関心とは別の次元の問題であり、学業に積極的に関わっているからといって、必ずしも専門職への就職の意欲が高まるわけではないようである。当然、保育者養成校の学生が保育職以外の職に就く道もあってよいわけであるが、先の安藤（2007）が指摘する

ように、多くのケースが保育職に向かないことを理由とした消極的な進路変更である点は注目すべきである。やはり保育者養成校には、多くの学生が保育者としての適性感を持ち、専門職への就業意欲を持つことができるよう援助することが求められる。3点目のコミットメントとして、この側面を「専門職への志向」と呼ぶことにしたい。

d) 職業の継続性

加えて第4に、就職後の職業継続に関わる側面も以上のコミットメントの連続線上に捉えることが可能であろう。文部科学省による平成19年度学校教員統計調査によれば、小学校、中学校および高等学校の教員では、離職者の5割から6割が定年退職によるもので、最も多い離職理由となっている。対して幼稚園教諭では、定年退職は離職者の5～10%程度にとどまり、転職（22.9%）やその他の理由のため（67.0%）に離職する割合がそれを上回っている。従来から保育者は、数年以内の離職が多いことが指摘されているが、近年では2、3年以内の早期離職も増加しているという（廣川，2007）。就業の継続には、内外の様々な要因が関連するとともに、在学中の各コミットメントが少なからず寄与していると考えられる。厳密に言えば、保育者養成校に在学中に、保育職の継続性に対する何らかのコミットメント（特に職業の継続に関する具体的行動）が生じるとは考えにくい。以上のような現状を踏まえ、保育の専門職への志向の延長上にあると考えられる、在学中の職業継続への意欲についてもコミットメントとして含めることにした。この側面を「職業の継続性」とする。

本研究の目的

以上のように、保育者養成の短期大学生は、入学から就職後まで、いくつかの側面でのコミットメントを短期間に求められることになる。すでに述べてきたように、これらのコミットメントの側面は、要求される時期が異なり（時系列）、前のコミットメントは次に続くコミットメントの基礎となる（階層構造）との仮定が可能である。保育者養成におけるコミットメントに階層性を考慮することによって、学生たちがどの段階で躓き、またなぜ意欲を減退させているのかを明らかにすることが可能になる。

そこで本研究では、下記3点を目的として実証的な検

討を行う。第1に、4つのコミットメントを測定するため、保育系短期大学生を対象とした尺度を開発する。同時に信頼性（内的整合性、再検査信頼性）および妥当性（因子的妥当性、基準関連妥当性、収束的妥当性）の検討を行う。第2に、本研究で仮定したコミットメントの階層性が支持されるかどうかを検証する。理論上隣り合うコミットメントは相対的に強い関連を示すことが予想されるが、これを確認する。第3に短期縦断調査により各コミットメント間の因果関係を探る。4つのコミットメントがどのような因果関係にあるのかについて、交差遅延効果モデル（cross-lagged effects model）を用いた検討を行う。

方 法

調査対象・調査時期

東海地方の短期大学1校の1年生を対象に2度の調査（12月、1月）を実施した。対象校は2年制の短期大学で、保育士資格と幼稚園教諭2種免許が取得可能となっている保育者養成校である。対象者は12月時（以下Time 1）で204名（女性200名、男性4名）、1月時（以下Time 2）は217名（女性212名、男性5名）であった。本研究では、実習や大学行事の効果を検討することを今後の課題とし、大学において特に大きな行事のないこの1ヶ月間に調査を行った。

いずれかの評定・記述に欠損のあった対象者を除いた結果、Time 1で193名（女性189名、男性4名、平均18.94歳）、Time 2で203名（女性198名、男性5名、平均18.95歳）が分析対象となった。なお対象者には、調査時に2時点のデータのマッチングのために学籍番号を使用することを説明し、同意が得られた場合に学籍番号を記入するように求めた。その結果、マッチングが可能であった174名（女性170名、男性4名、平均年齢18.89歳）が因果関係の分析対象となっている。

調査内容（Time 1）

階層的大学コミットメント尺度（保育版）の項目「大学適応」に関しては、既存の大学生生活不安尺度（藤井，1983）、学生生活満足度尺度（吉村，2004）を参考にしながら9項目を作成した。「専門領域への興味」は保育や子どもに関する事項や関係する専門科目に対して関心を持つ傾向を測定する項目を独自に作成した（6項目）。「専門職への志向」および「職業の継続性」も同

様に、保育職に就く意欲やその継続への姿勢を示す項目をそれぞれ6項目作成した。計27項目について、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5件法で評定するように求めた。

なお、以降の尺度項目は新たに作成されたこの尺度の基準関連妥当性、収束的妥当性の検討のために実施された。「大学適応」は対人関係に関する満足度や大学生生活の充実感と、「専門領域への興味」は大学での学習の充実感や保育に関する自己効力感（保育者効力感）と関連すると考えられる。「専門職への志向」や「職業の継続性」は保育者効力感や就職可能性と対応することが予想される。さらに興味のある科目を回答するように求めることで、専門科目を挙げる傾向と「専門領域への興味」の得点が対応していることを確認する。また、いずれの下位尺度も将来の職業と密接にかかわる事柄に対するコミットメントを測定していることから、同一性地位（Marcia, 1966）の1つの観点である、人生の重要な領域に関する積極的関与（大野，1995）とある程度の関連が示される必要があると考えられる。よって同一性地位との関係についても併せて検討を行うことにする。

友人関係の満足感

加藤（2001）で作成された友人関係満足感尺度を実施した。この尺度は「周囲の人たちに受け入れられていると感じる」、「私は友達ととても気持ちを通じ合っている」等の6項目から成る。階層的大学コミットメント尺度と同様に「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5件法で評定するように求めた。

大学生生活、学習の充実感

見館・永井・北澤・上野（2008）で用いられた大学生生活の満足度を測定する設問（2問）を採用し、若干表現を修正したものを実施した。「この1週間の生活を思い出してください。どのような内容であれ、『毎日が充実している』と感じますか」（大学生生活の充実感）、「現在の大学での授業や演習、自習等を含めた勉強は、あなたにとって充実したものとなっていますか」（学習の充実感）のそれぞれの項目に対して「充実していない」から「充実している」までの5件法で回答するように求めた。

保育者としての効力感

保育者効力感尺度10項目のうち、三木・桜井（1998）の本調査で.60以上の因子負荷を示していた上位5項目（「私は、子どもの能力に応じた課題を出すことができると思う」、「私は、どの年齢の担任になっても、うまくやっ

ていけると思う」、「私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う」、「私は、クラス全体に目を向け、集団への配慮も十分できると思う」、「私は、1人1人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う」、5項目で $\alpha = .89$) を使用した。先行研究に倣い、「ほとんどそうは思わない」から「非常にそう思う」までの5件法で回答を求めた。

保育者として就職する可能性

「今現在のあなたの気持ちとして、あなたが幼稚園、保育所、施設などで保育者として働く可能性は何%くらいあると思いますか」との質問に対し、就職可能性を0から100までのパーセンテージで回答するように求めた。

興味を持っている授業名

「あなたが一番興味を持っている授業は何ですか。科目名(授業の曜日と時間だけでもかまいません)を教えてください」との質問で、最も興味を持っている授業を記述するように求めた。

調査内容 (Time 2)

階層的大学コミットメント尺度 (保育版)

Time 1 と同様に 27 項目を実施した。

同一性地位

現在の自己投入 (コミットメント) の下位尺度を含む加藤 (1983) の同一性地位判定尺度を実施した。この尺

度は「現在の自己投入」、「過去の危機」、「将来の自己投入の希求」の3下位尺度12項目から成る。「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5件法で評価を求めた。

結 果

1. 階層的大学コミットメント尺度の因子分析

Time 1 に関して、各項目の平均値、標準偏差を確認した後、階層的大学コミットメント尺度の因子分析を実施した (主因子法, promax 回転)。仮定どおり4因子解を採用し、特定の因子に.35以上のパターン、他の因子に.25未満のパターンを示した項目のうち、上位4項目を残して再度因子分析を行ったものが Table 1 である。第1因子から順に、「大学適応」、「専門職への志向」、「職業の継続性」、「専門領域への興味」の項目がそれぞれ高いパターンを示していた。

Time 1 の因子構造をもとに Time 2 のデータを用いて確認的因子分析を実施したところ、対応する項目での推定値は全て有意 ($p < .001$) となった。適合度も尺度の因子の妥当性を支持する結果であった ($\chi^2 (98) = 216.09$, $GFI = .89$, $AGFI = .85$, $CFI = .93$, $RMSEA = .08$)。Table 2 に階層的大学コミットメント尺度の平均値、標準偏差、係数を示す。係数は.71~.88の範囲にあり、各尺度が4項目であることを考慮すれば十分な値で

Table 1 階層的大学コミットメント尺度 (Time 1) の因子分析結果

		Time 1			
		F1	F2	F3	F4
大学適応	私はこの大学に入ったことを誇りに感じる。	.67	-.02	.00	.21
	この大学は私に合っていると思う。	.62	.04	.00	.13
	大学で友人たちと会えるのがうれしい。	.78	-.01	-.02	-.18
	毎日、大学に通うのが楽しい。	.89	-.08	.10	-.17
専門領域への興味	保育の専門の授業はしっかりと聴くようにしている。	-.12	-.10	.01	.87
	保育に関係した本を自主的に読むことがある。	-.19	-.04	.19	.60
	保育の専門の授業は面白い。	.20	.05	-.11	.70
	日ごろから保育や子どもについて考えることが多い。	.07	.15	.04	.39
専門職への志向	私は保育者になることを決めている。	.08	.92	-.05	.01
	保育者になること以外の道をあまり考えていない。	-.15	.77	.15	-.16
	時期が来たら、保育者になるために就職活動をするつもりである。	.06	.54	.02	.15
	保育者になるかどうかまだ迷っている。	.02	-.84	.02	.01
職業の継続性	保育者として働き続ける自信があまりない。	-.05	-.12	-.42	-.15
	保育者になれたとしても、あまり長続きしないような気がする。	-.07	-.04	-.63	-.08
	私は人よりも長く保育の仕事が続けると思う。	-.01	-.05	.84	.00
	保育の仕事をしてできるだけ長く続けていきたい。	.03	.11	.67	.00

Table 2 階層的コミットメント尺度の平均値, 標準偏差および信頼性係数

	Time 1			Time 2			再検査 信頼性(r)
	平均値	(標準偏差)	係数	平均値	(標準偏差)	係数	
大学適応	14.22	(2.75)	.82	14.02	(2.93)	.81	.79
専門領域への興味	13.84	(2.48)	.74	14.19	(2.46)	.71	.74
専門職への志向	15.24	(3.45)	.85	15.25	(3.78)	.88	.77
職業の継続性	12.06	(2.82)	.81	12.48	(3.02)	.86	.75

Table 3 他尺度との関連 (偏相関係数, Time 1)

	友人関係 満足感	大学生活 の充実感	学習の 充実感	保育者 効力感	就職 可能性
大学適応	.49***	.28***	.25***	.13	.19**
専門領域への興味	.20**	.11	.32***	.15*	.09
専門職への志向	.02	.00	.15*	-.02	.59***
職業の継続性	-.14*	.02	-.04	.24***	.08

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001
当該尺度得点以外の階層的大学コミットメント尺度得点を統制

あった。また、Time 1 と Time 2 で対応する尺度の相関係数は .74 から .79 の値を示しており、尺度が十分な再検査信頼性を有していることも確認された (Table 2)。以降の分析のため、逆転項目については処理を行った後、Time 1, Time 2 の各尺度の合計得点を尺度得点とした。

2. 階層的大学コミットメント尺度と他変数との関連

a) 基準関連妥当性

作成された尺度の基準関連妥当性を検証するため、同時に測定した他の尺度との偏相関係数を算出した (Table 3)。まず「大学適応」では、友人関係の満足感、大学生活の充実感、学習の充実感との間に有意な関連が見られた。また、弱いながらも就職可能性とも関連が見られた。「専門領域への興味」は、学習の充実感、友人関係の満足感、保育者効力感などの相関係数が有意であった。また、「専門職への志向」は就職可能性と $r=.59$ の相関係数を示し、学習の充実感とも弱い関連が見られた。最後に「職業の継続性」に関しては、保育者効力感と関連が見られ、友人関係満足感とは弱いながらも負の係数が得られた。これは後述の、「職業の継続性」と他尺度の比較的強い相関関係によるものだと考えられる。いずれも尺度の定義と対応する結果であり、本尺度の妥当性を支持するものであると考えられる。

b) 興味のある科目との対応関係

続いて、興味のある授業として挙げられた科目名と尺度得点との関連を検討した。全体で 16 科目が挙げられており、そのうち、選択率が Time 1 の分析対象者の 5% (10 名) を上回ったのは、『教育実習法』(事前・事後指導, 43.5%), 『乳児保育』(10.9%), 『音楽』(声楽およびピアノ, 8.8%), 『図画工作』(5.2%), 『体育』(教養科目の体育実技, 5.2%) の 5 科目であった⁽³⁾。これらのいずれかを選択した対象者 (142 名) を選択した科目によって群分けし、選択した科目を独立変数、階層的大学コミットメント尺度の各得点を従属変数とする一要因分散分析を実施した。各群の平均値 (標準得点) を Figure 1 に示す。

分散分析の結果、「大学適応」($F(4,137) = 3.41, p < .05$)、「専門領域への興味」($F(4,137) = 7.10, p < .001$)、「専門職への志向」($F(4,137) = 6.64, p < .001$)、「職業の継続性」($F(4,137) = 5.59, p < .001$)のいずれの尺度でも有意差が見られた。Tukey の HSD 法 ($p < .05$) を実施したところ、「大学適応」では、『教育実習法』を選択した対象者で『体育』を選択した対象者よりも高い傾向にあった。「専門領域への興味」は、『教育実習法』もしくは『乳児保育』を挙げた対象者と『体育』を挙げた対象者の差が有意であった。「専門職への志向」では、『教育実習法』、『乳児保育』と『体育』、『音楽』の間の差が有意であった。「職業の継続性」に関しては、「専門領域

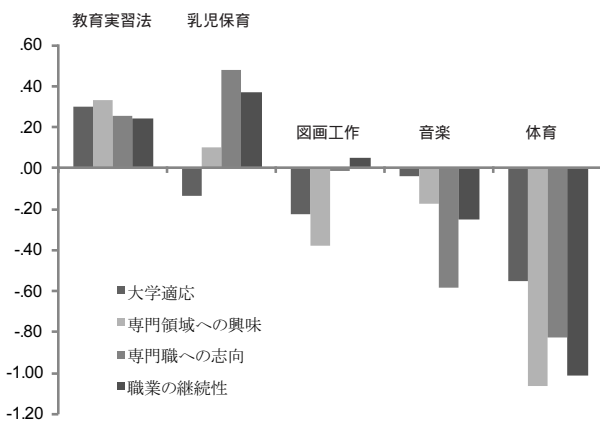


Figure 1 興味のある科目と階層的大学コミットメント尺度得点 (標準化後)

への興味」と同様に、『教育実習法』、『乳児保育』と『体育』の間に有意な差が見られた。尺度間にはある程度の相関関係があるため、いずれの尺度においても有意差が見られたが、効果量 (r^2) はそれぞれ .09, .17, .16, .14 であり、「専門領域への興味」で最も高い値を示していた。つまり、独立変数である科目の選択傾向は、下位尺度の中でも「専門領域への興味」に対して最も説明率が高かったことになる。以上の結果から、興味のある科目と「専門領域への興味」との対応関係が確認された。

c) 同一性地位との対応関係

同一性地位判定尺度について、3 下位尺度それぞれで

逆転項目の処理を行った後に 係数を算出したところ、過去の危機 ($r = .41$)、将来の自己投入の希求 ($r = .36$) で低い値を示した。因子分析 (主因子法, promax 回転) の結果からも加藤 (1983) と対応する 3 因子は抽出できなかったため、ある程度の内的整合性が確認された現在の自己投入 ($r = .64$) の得点のみを分析に用いた。階層的大学コミットメント尺度との相関係数は、「大学適応」が $r = .36$ 、「専門領域への興味」で $r = .40$ 、「専門職への志向」で $r = .42$ 、「職業の継続性」で $r = .40$ であった (いずれも $p < .01$)。他の階層的大学コミットメント尺度を統制した偏相関係数は、それぞれ .16, .14, .13, .12 であり、「大学適応」のみが有意 ($p < .05$) で、その他は 10% 未満の水準 ($p < .10$) にあった。現在の自己投入は、「自己定義を実現し、自己を確認するための、独自の目標や対象への努力の傾注の有無」(加藤, 1983) と定義されるものである。よりコミットメントの対象 (大学, 専門科目, 職業, 職業の継続) が明確である階層的大学コミットメント尺度では、そのいずれの下位尺度でも有意な相関関係が確認された。

3. 階層的大学コミットメント尺度の階層性の検証

因子間・下位尺度間相関

先の Time 1 の探索的因子分析および Time 2 の確認的因子分析の因子間相関を示したものが Table 4-1 である。係数に有意な差こそ認められないものの、隣り合う

Table 4-1 階層的大学コミットメント尺度の因子間相関

	Time 1				Time 2			
	大学適応	専門領域への興味	専門職への志向	職業の継続性	大学適応	専門領域への興味	専門職への志向	職業の継続性
大学適応	-	.59	.51	.35	-	.76	.67	.55
専門領域への興味		-	.61	.53		-	.80	.59
専門職への志向			-	.63			-	.66
職業の継続性				-				-

Time 1 は探索的因子分析による因子間相関, Time 2 は確認的因子分析による相関の推定値

Table 4-2 階層的大学コミットメント尺度の下位尺度間相関

	Time 1				Time 2			
	大学適応	専門領域への興味	専門職への志向	職業の継続性	大学適応	専門領域への興味	専門職への志向	職業の継続性
大学適応	-	.43	.40	.35	-	.37	.35	.39
専門領域への興味		-	.50	.50		-	.60	.49
専門職への志向			-	.61			-	.66
職業の継続性				-				-

因子間で高い係数が得られ、離れるほど係数が低くなる傾向が見られた。これらは、4側面へのコミットメントが階層構造をなしているという仮定を支持する結果であると言えよう。下位尺度間相関 (Table 4-2) においても同様な傾向が確認された。ただし、Time 2の下位尺度得点では、「大学適応」と「専門領域への興味」との間の相関係数が若干低く、「職業の継続性」との係数を下回っていた。

因果関係モデルの検討

階層的大学コミットメント尺度の下位尺度得点間の因果関係を検討するため、Time 1の得点を独立変数、Time 2の得点を従属変数とするパス解析を実施した。Time 1の変数間、およびTime 2の変数の誤差間に共分散を仮定したモデルを用いて共分散構造分析を実施した (AMOS ver. 18を使用)。なお、分析に投入したのは観測変数 (尺度得点) である。

飽和モデルから検討を始め、パスの推定値が有意でなかった部分に関してはパスを仮定しないモデルへと修正し、得られた結果が Figure 2 である。適合度指標はそれぞれ、 $\chi^2(9) = 17.11$, GFI=.98, AGFI=.91, CFI=.99, RMSEA=.07であった。まず、「大学適応」は「職業の継続性」の有意な予測因であった。また、「職業の継続性」から「専門領域への興味」、「専門職への志向」へのパスが有意であった。つまり、狭義の大学適応が専門職を続けていくことへの自信を高め、専門的知識や技能、専門職への興味・関心へと影響している様相が示された。それぞれ同一の変数間では、.59から.79のパス係数が得られたが、比較して「専門領域への興味」と「専門職への志向」でTime 1からTime 2への係数の値が低く、

「職業の継続性」による影響の強さがうかがえた。

考 察

階層的大学コミットメント尺度 (保育版) の信頼性・妥当性について

まずTime 1の探索的因子分析、Time 2の確認的因子分析の結果からは、想定通りに4因子構造が確認された。項目作成時には、理解が容易であるように簡素なワーディングを心掛けたが、互いに中程度の相関関係 (Table 4-1, 4-2) にありながらも、安定した4つのまとまりを確認することができた。1ヶ月という短い期間ではあるが、2時点の相関係数では.73から.79の値が得られ、再検査信頼性についても十分な値が得られたと言えよう。

Time 1で実施された友人関係満足感、大学生生活の充実感、学習の充実感、保育者効力感、就職可能性との関連からは、ほぼ予測通りの結果が得られた。「大学適応」は友人関係満足感や大学生生活の充実感などと有意な相関を示し、以降、仮定上で後者のコミットメントほど、専門的学業や技能、就職に関する変数と有意な関連を示していた。厳密には、「専門職への志向」と保育者効力感との間、「職業の継続性」と就職可能性との間で偏相関係数が有意でなかった点は予想と異なっていた。しかし、後の因果関係の分析から明らかとなったように、「職業の継続性」が「専門職への志向」に影響するという結果を考慮すると、保育者効力感が「職業の継続性」の効力感を高め、それが就職活動への志向を高めた結果、就職可能性が高く見積もられたのだと考えられる。十分に解釈が可能であり、特に尺度の妥当性を疑うような結果ではないと考えられる。

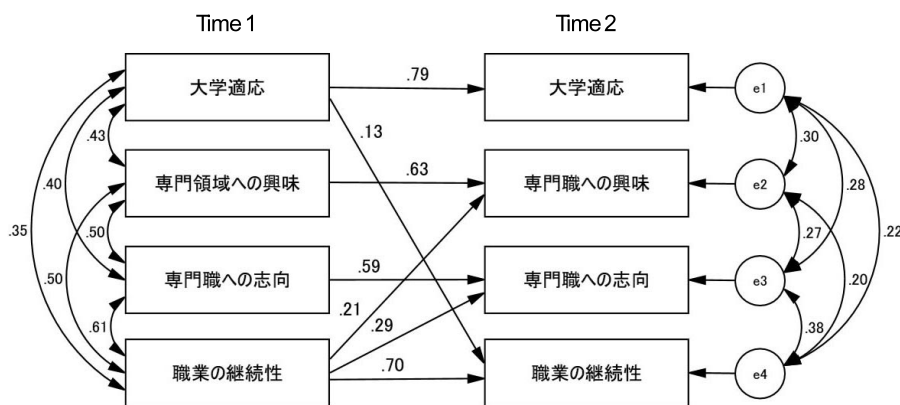


Figure 2 階層的大学コミットメント尺度の交差遅延効果モデルによる検討

また、興味のある授業の記述内容との対応関係からは、保育の専門授業ではない科目を最も興味のある授業として挙げる対象者ほどコミットメントが低いことが明らかとなった。微々たる違いではあるが、「専門領域への興味」で最も高い効果量が示されていることから、中でもこの側面とのかかわりが深いことが示唆された。本調査の企画段階では、専門科目と非専門科目の2種に分類し、コミットメントの得点比較を行う予定であったが、科目の内容が保育から複合的、周道的になるほどコミットメント得点が低くなる傾向が確認された点は興味深い。問題提起で述べた、保育の専門授業よりも教養科目にウェイトを置いているような学生像をよく表した結果であろう。逆に保育との関連性が相対的に低い授業が、専門科目に対して高く動機づけられない学生にとって、大学における貴重な居場所となっていることも考えられる。同時に、教養系科目が保育者養成における教育内容の幅を広げている点を改めて確認できる結果であった。

さらに、同一性地位の観点からは、現在の自己投入の傾向がいずれの階層的コミットメント尺度得点とも有意な相関係数を示した。中でも、「大学適応」に関しては、他尺度を統制後の偏相関係数でもその有意性が示された。対象者が1年生であり、彼女ら、彼らが求められる主なコミットメントの対象が大学生活全般であり、それが将来の職業と密接にかかわっていることを考えると、妥当な結果であると判断できる。学生たちが現時点で関わっているのは職場ではなく大学なのであり、先に指摘した居場所の問題ともかかわりの深い結果であると解釈できよう。

以上、いずれの結果も作成された尺度の定義、内容と合致する結果であった。因子的妥当性、基準関連妥当性や収束的妥当性などの観点から、十分な信頼性と妥当性を有する尺度を作成することができたと考えられる。

適応・コミットメントの階層性

因子間相関、下位尺度間相関からは、階層的大学コミットメント尺度が互いに中程度の相関関係にありながらも、隣り合う下位尺度で相対的に高い値を示すことが明らかとなった。ただし、Time 2の下位尺度間相関 (Table 4-2) では、「大学適応」と「専門領域への興味」との関連が弱く、仮定通りには成っていない。推測にすぎないものの、休業あけの調査であることが大学生活に関するイメージを多少なりとも変化させ、「大学適応」に関する

項目への評価に影響を与えた可能性が考えられる。また、調査時期が1年生の後期であることから、大学生活にも十分に慣れ、人間関係も安定化したことにより「大学適応」が学業的なコミットメントに影響を持つ段階を過ぎたとも考えられる。いずれにせよ、隣り合うコミットメントの関連性は、Time 1とTime 2の両データでおおむね確認されたと言えよう。

さらに、Time 1を基準変数、Time 2を従属変数とする交差遅延効果モデルの検討の結果、「大学適応」を基礎としながらも、Time 1の「職業の継続性」がTime 2の「専門領域への興味」や「専門職への志向」を予測しており、保育職を続ける自信を持ち、それに意識が向かっていることが専門科目への興味やそれに関連する行動を支えると同時に、専門職に就こうという意欲を喚起している様子がうかがえた。因果モデルからは、仮定していた階層性とは一部逆のパスが得られたことになり、1年生の冬季において「職業の継続性」に関する効力感が重要な役割を担っているという興味深い結果が得られた。浦上 (1996) は、就職活動における自己効力感や自己概念の明確化の機能について、幼児教育科生と教養学科生との比較を行っている。自己と職業の双方の理解と統合、また、実際の就職活動の計画や実行を通して自己概念が明確化し、効果的な進路選択行動に至るとのモデルは、教養学科生でのみ支持された。一方で、幼児教育科生では、就職活動の計画や実行が自己概念の明確化に与える影響が確認されず、その解釈として、専門性の高さや、幼児教育科生が限定された職業選択を認識している可能性について言及されている。確かに、様々な職業を実際に探索していく過程を経て自分に合った職種を絞り込んでゆくような一般的な職業選択のモデルは、保育者養成校の学生にはあてはまりにくいであろう。本研究でも、専門領域への興味・関心が就職意欲を高め、継続性への効力感を得るといった、段階を経た職業意識の獲得を想定していた。しかし保育者養成校の学生の専門職志向は、すでに入学時にある程度高いことを考えると、専門職をライフ・ワークとして続けることができるのかどうかという点が、学生たちにとって、専門的な学習を重ねて保育者として就職すべきかどうかを今一度吟味する上で重要な観点となるのは納得できよう。

ただし忘れてはならないのが、1年生を対象とした分析結果である点である。例えば学外実習については、カリキュラム上、調査時までには幼稚園実習の2週間しか実

施されておらず、対象者達は幼稚園、保育所、施設での全実習の1/5の時間しか経験していない。この時期の保育職に対するイメージは必ずしも現実的なものではないと考えられ、そのような現実とは少なからず乖離した職業イメージのもとで専門職の継続性への効力感が形成され、それが専門科目へのコミットメントや就職活動への意欲を支えているということになる。早期離職の問題やリアリティショックの観点から、就職直前の2年生を対象に、より具体的な職業観の形成をねらいとした授業やオリエンテーションを展開する養成校も多い。しかし、本研究の結果からは、1年生の早い段階での職業観が授業へのモチベーションや就職に向けての自発的行動にも関わっていくことが示された。保育職に関する具体的情報をどの時期にどのような形で提供すべきなのかを考える上で示唆的な結果であろう。

本研究の問題点と今後の課題

本研究では、1校のみを調査対象とし、1年生の12月から1月という限られた時期での短期縦断研究が実施された。保育者養成校の学生のひとつの適応の形を示すことはできたと考えが、一般化に向けていくつかの検討課題が残されている。第1に、様々な保育者養成校を対象にした調査が求められる。本研究の調査校は、学生募集も順調であり、卒業生の就職率が高く、その中でも専門職（保育職）への就職率が非常に高い状況にある。保育者になるという気持ちの強い学生が比較的多数入学しており、本研究の結果は、現時点ではそのような環境の中での適応の一形態であると解釈されるべきであろう。また同一の養成校であっても、クラスによる雰囲気・モラルの違いもあり、それらの影響、差異についても検討する必要がある。第2に、短期大学の2年間や就職後までの追跡調査が求められる。本研究では因果関係の分析のために、行事を挟まない1ヶ月後のデータを用いたが、実習等をはじめとする行事が適応状態に及ぼす効果や、時期や学年による変化を検討することは重要な検討課題である。第3に、4年制大学における保育者養成校や他の専門分野の高等教育機関での適応状態を考えて行くことも求められる。初年次教育で重視される狭義の大学適応から始まり、教養科目からより専門性の高い授業の履修を求め、そして得た技能を生かした職業選択を促すという学修の進行や学生指導の流れは、ほぼ多くの高等教育機関で共有されるものである。これらの検討を

進めて行くことで、学生の心理的適応状態と高等教育の求めるサクセシブルな学生像とを結び付けた、双方の視点による適応的な状態が明らかとなり、高等教育機関によるより具体的な支援が可能になると考えられよう。

引用文献

- Agliata, A. K., & Renk, K., (2008). College students' adjustment: The role of parent-college student expectation discrepancies and communication reciprocity. *Journal of Youth and Adolescence*, 37, 967-982.
- 安藤史高 (2007). 保育系短期大学生の就職動機づけに対して自律性欲求・進路変更が及ぼす影響 一宮女子短期大学紀要, 46, 71-78.
- Enochs, W. K., & Roland, C. B. (2006). Social adjustment of college freshmen: The importance of gender and living environment. *College Student Journal*, 40, 63-73.
- 藤井義久 (1983). 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 68, 441-448.
- 浜崎隆司・加藤孝士・寺園さおり・荒木美代子・岡本かおり (2008). 保育実習が保育者効力感、自己評価に及ぼす影響：実習評価を媒介した因果モデルの検討 鳴門教育大学研究紀要, 23, 121-127.
- 半澤礼之 (2009). 大学1年生における学業に対するリアリティショックとその対処 青年心理学研究, 21, 31-51.
- Hickman, G. P., Bartholomae, S., & McKenry, P. C. (2000). Influence of parenting style on the adjustment and academic achievement of traditional college freshmen. *Journal of College Student Development*, 41, 41-54.
- 廣川大地 (2007). 保育者の仕事継続意欲、離職意向に関する研究の動向 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 40, 83-90.
- 本田由紀 (2009). 教育の職業的意義——若者、学校、社会をつなぐ ちくま新書
- 石川隆行 (2005). 保育者を目指す短大生の保育者効力感について：2月の追跡調査より 聖母女学院短期大学研究紀要, 34, 96-99.
- 加藤厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- 加藤司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.
- 小平英志・安藤史高・中西良文 (2003). 大学生・短期大学生の生活適応と関連する楽観性の諸側面——学校適応、対人ストレス経験、身体的健康を指標として——学校カウンセリング研究, 6, 11-18.
- 小平英志・鈴木裕子 (2008). 保育者養成における初年次教育の試み (2)——学生の授業評価からの検証——全国保育士養成協議会第47回研究大会研究発表論文集, 220-221.
- Lidy, K. M., & Kahn, J. H. (2006). Personality as a predictor of first-semester adjustment to college: The mediational role of perceived social support. *Journal of College Counseling*, 9, 123-134.

Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.

三木知子・桜井茂男 (1998). 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, 46, 203-211.

見館好隆・永井正洋・北澤武・上野淳 (2008). 大学生の学習意欲, 大学生生活の満足度を規定する要因について 日本教育工学会論文誌, 32, 189-196.

文部科学省 (2010). 学校基本調査 ― 結果の概要 (平成22年度速報値) 2010年8月5日

<http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/_icsFiles/afiedfile/2010/08/17/1296403_1_1.pdf> (2010年9月10日アクセス)

西山修・富田昌平・田爪宏二 (2007). 保育者養成校に通う学生のアイデンティティと職業認知の構造 発達心理学研究, 18, 196-205.

Norvilitis, J. M., Sun, L., & Zhang, J. (2010). ADHD symptomatology and adjustment to college in China and the United States. *Journal of Learning Disabilities*, 43, 86-94.

大久保智生 (2010). 青年の学校適応に関する研究 ― 関係論的アプローチによる検討 ナカニシヤ出版

大野久 (1995). 青年期の自己意識と生き方 落合良行・楠見孝 (編) 講座生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し ― 青年期 金子書房 pp.89-123.

小沢一仁 (2000). 自己理解・アイデンティティ・居場所 東京工芸大学工学部紀要 (人文・社会編), 23, 94-106.

Rabiner, D. L., Anastopoulos, A. D., Costello, E. J., Hoyle, R. H., & Swartzwelder, H. S. (2010). Predictors of non-medical ADHD medication use by college students. *Journal of Attention Disorders*, 13, 640-648.

下山晴彦 (1996). スチューデント・アパシー研究の展望 教育心理学研究, 44, 350-363.

Swenson, L. M., Nordstrom, A., & Hiester, M. (2008). The role of peer relationships in adjustment to college. *Journal of College Student Development*, 49, 551-567.

鉄島清毅 (1993). 大学生のアパシー傾向に関する研究: 関連する諸要因の検討 教育心理学研究, 41, 200-208.

上原明子 (2008). 養成校における学生支援 ― 新しい学生指導の理論と展開 ― 平成20年度全国保育士養成セミナー分科会 (C-1)

浦上昌則 (1996). 女子短大生の職業選択過程についての研究: 進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から 教育心理学研究, 44, 195-203.

吉村斉 (2004). 女子学生の専門職就職意欲および学生生活への満足度を規定する要因: 自己表現と小集団閉鎖性に注目して 青年心理学研究, 16, 1-14.

注

(1) 本研究は2009年度日本福祉大学課題研究費の助成を受けた。なお、本研究の一部は日本教育心理学会第52回総会にて発表された。

(2) この意味で、本研究で測定されるのは「適応感」(ex. 半澤, 2009) や「主観的適応状態」(大久保, 2010) とは異なる。

項目の内容 (何に適応するべきか) は、高等教育機関において何にコミットメントすることが望ましいかという外的基準 (望ましい履修や単位取得, 将来の職種モデル等) が前提となっている。本研究では一貫して「適応」と呼ぶこととする。

(3) 実際の開講科目の名称とは一部異なる。